

戦前台湾における現地人布教

現地人布教：嘉義東門教会と斗六教会

戦前の台湾における天理教の布教活動を考察した橋本武の論考によれば、台湾での布教活動が「邦人伝道」であったことが指摘されているが、実際、台湾での布教活動は異文化伝道であったとはいえ、信者のほとんどが内地人であった（橋本：9～11頁）。これは、民族や文化を超えて布教することの難しさの表れである。

しかし、日本本土から台湾へ渡った内地人ではなく、台湾の現地人（本島人）を主な布教対象とした教会もあった。その代表的な教会が、すでに紹介した女性布教師・加藤きんによって設立された嘉義東門教会と斗六教会である。この2つの教会は同じく台湾中部（嘉義と雲林）にあり、中国大陸から台湾へ渡ってきた漢人が最も早く入植した地域に位置する。この地域が早くから開拓されたのは、台湾で最も長い河川である濁水渓流域にあり、平野部は肥沃な農業地帯だったためである。実を言えば、日本による台湾統治が開始されるはるか昔から漢人によって開拓され発展してきた地域であり、日本による統治が始まって著しく発展した都市部に比べて居住する内地人はもともと少なかったのである。この両教会が主に現地人を対象に布教を展開した要因には、このような地域的特性が考えられる。

ただし、嘉義東門教会についてはもう一つ特筆すべき事情があった。それは、すでに同じ地区に山名系の嘉義教会が設置されていたことから、当時の教区の方針として同じ地区に多くの教会（宣教所）の認可を与えないことにしており、認可を得るのに時間がかかったということが挙げられる。嘉義においてすでに設立されていた嘉義教会は内地人を布教の対象としており、現地人を対象として布教を展開していた嘉義東門教会と布教対象が異なっていたため、嘉義東門教会は台湾現地人を対象とすることを教区委員との間で取り決めることで、設立の認可を得たという（金子：111～112頁）。しかし、当時の台湾における天理教教会設立において、布教対象を現地人にするか、内地人にするかを明確に分類した事例は他にないため、これは特別な事例であると考えべきである。

一方、斗六教会は、現地人を対象にすることを意図的に選択したのではなかった。むしろ、上述の地域的特性から、布教活動を展開すると、自ずと当該地域の居住者のほとんどを占める現地人が布教対象となったというのが実情だった。

なお、嘉義東門教会も斗六教会も同じ山名系に所属しているが、諸井国三郎会長による初期の台湾伝道と直接つながっていない。つまり、山名大教会によって組織的に布教展開するなかで設立されたのではなく、布教師とその家族による孤軍奮闘の末に教会が設立されたのである。それゆえ、この2つの教会の設立経緯は、それぞれ異なった事情を背景にしている。

斗六教会の設立経緯

嘉義東門教会の初代会長となった加藤きんは、夫の仕事の関係で台湾へ渡る前から天理教に入信しており、台湾で布教することを目指していた。これに対して斗六教会の初代会長山田彦太郎は明治36（1903）年、26歳で台湾に渡って台北で一時期働いた後、台南新報社副社長宮本一学の紹介により、嘉義県中

埔庄に60甲地（約60ヘクタール）の畑を購入し、甘蔗園を開いた。そうした中、大正4（1915）年に次男巖^{いわお}の出産後、産後の患いで妻クマが3日後に33歳の若さで出直してしまった。さらに、幼子である長男龍彦（5歳）、長女八重子（4歳）を抱え、母てよと共に子育てや仕事に励む中、台湾の風土病であるマラリアを患い、13回も入退院を繰り返した。医者から台湾では治療が困難であるため、内地に帰って治療をするように勧められたが、すでに日本での財産は全て処分して、台湾の事業に当ててしまっており、面目なく帰国もできず、長年の闘病で農園の仕事も人に任せたままで、台風等の天災による借財がかさんでいた。

このような人生の危機に直面した中、かねてより同じ内地人仲間として度々尋ねて来てくれていた嘉義教会の吉田好藏会長の導きにより、天理教に入信した。「人を救けて我身救かる」との教えのままに布教に歩いたが、「我身の病気を先に治してから人を救けよ」とあざ笑われた。そんなある時、マラリアの発作に襲われて帰宅した後、あるだけの蒲団をかぶり悪寒に震えながらウトウトしていた。その時である。赤衣を召した気品のある白髪の老婆が現れて、直接おさづけの取り次ぎを受けたのである。「おやさま！」とお呼びした自分の声で目が覚め、側にいた次男巖に尋ねるも「誰も来ていない」との返事だった。しかし、それ以来あれだけ苦しんだマラリアはすっきりと御守護いただいた。

彦太郎は、幼児と老母を抱えての布教で金に困り、働くところでは胃病が起こって苦しんだ。しかし、これではいけないとまた仕事を辞めて布教に歩くのだった。そして、大正10（1921）年2月、渡台後苦勞を共にした母てよが出直したのを機に、吉田会長より斗六で布教せよとの命を受け、斗六での布教が本格的に始まる。

次々と不思議な御守護を見せてもらう中、病人は確かに救かるが、救かってしまえばもうそれで参拝しなくなるという道中が続いた。その中で3人の子供たちは栄養失調で痩せこけてしまい、学校では「天理教の子供と遊ぶな、もし倒れたりすれば大変だ」と言われるような赤貧の日々を過ごした。そしてついに長男龍彦が学校で倒れて重体となったこともあって、男手一人で子育てをしながらの布教は大変であるからと、吉田会長の勧めで、おぢばの天理養徳院に子供たちを預けることになり、懸命なる単独布教を続けた。やがて3人の子供たちがおぢばで成長して台湾に戻り、それぞれが父を助けて布教する中、次第にその成果が実るようになった。

昭和7（1932）年、陳林宝、楊桂、陳幼という3人の台湾人女性を案内しての初めてのおぢばがえりがようやく実現した。陳幼は中風のため、彦太郎が背中におぶっての帰参であった。この後、斗六教会からのおぢばがえりが毎年続くことになったのである。

[参考文献]

- 橋本武（1951）「台湾伝道概観」『宗教文化研究所報』4（3）：9～11頁。
金子圭助（1983）『炎の女伝道者 加藤きん』天理教道友社。